

名古屋
山三郎
不破
伴左衛門

繪本
稻妻表紙
八

3151
8



へ13
3151
8

昔話 稻妻表紙巻之五 下冊

江戸 山東京傳編

十九 刀劍の稻妻

その時麻飛あまひはたぢ小幡こわたの里さとみつりて山三郎やまざぶろうふその日子こ細こをほ
ぶきみつり。葛城かつらぎが誠心まことこころを告つげあむふいとほく存ぞんざむせめて一度ひとたびの
かの地ちみかん越こあつて。御對面ごたいめんあはしとまめけと山三郎やまざぶろうひひけらへ
五條坂ごじょうざか小菅こすげ城じやうといふ名妓めいぎありといひかめそあのみ同どうはるがその者もの高間たかま茶ちや
右赤門みぎあかどの娘むすめ岩橋いわはしあてあふんといふ夢ゆめあてもあはざりた。かの者ものの親おやくの得心こころえを
某そのといふなほげの女むすめわうといふども。今花街いまはなまち小あぢらりわづれの身みと
かりたる女むすめ對面たいめんせんい武士ぶしの名なをけうといふ似にたり。かれが志こころざしの不便ふびんかり
といふども。對面たいめんへかゝるふがうとていふ。麻飛あまひひひけらへをかりかた

名古墨巻之五下

一

そいたぐう。葛城の物つりをまけ。頃日雲小稻妻の衣裳を着
 たる侍五人のり。の地の小往來するは。そのうち一人のあり。を伴左衛門
 外ハ深層の三平等四人の者。うごひ。これの。推量の
 ごく。相公をはり。出。つ。お。せん。謀計。先だち。御
 父君夢中。小告玉。一。は。更。葛城。の。誠心。う。の。所
 あけ。一。度。の。地。お。ん。に。あり。て。葛城。の。を。た。の。を。ひ。の。計
 の。を。の。内。外。より。相。置。を。さ。の。五人。一。等。お。取。玉。の。良。計。と。て
 あ。ま。お。し。け。と。君。父。の。讒。言。の。共。小。天。を。戴。と。と。せ。眼。前。の。敵。を。て
 時。を。失。ひ。玉。の。ん。こと。の。め。く。あ。る。と。復。讒。言。の。為。花。街。の。と。あ。の
 こと。の。で。う。耻。玉。の。や。と。の。の。山。三。郎。が。の。と。ひ。その。夜。麻
 糸。を。具。一。老。の。び。や。う。ふ。して。五。條。坂。の。と。神。林。が。り。の。た。ら。ぬ。て。葛

城子對面。一。け。は。葛城。の。む。の。あ。と。山。三。郎。の。露。を。る。も。あ。と
 め。た。る。詞。の。り。終。夜。只。復。讒。言。の。計。を。談。て。朝。ま。の。れ。の。と。の。ぬ
 くれ。より。后。葛城。の。り。と。り。金。銀。衣服。を。お。と。て。山。三。郎。を。と。ん。心。の。誠
 を。と。び。け。山。三。郎。は。た。ぐ。ひ。す。れ。なる。女。の。と。感。致。お。た。り。の。葛
 城。の。伴。左。衛。門。が。面。又。知。と。の。づ。と。を。り。づ。れ。と。の。山。三。郎。毎。夜。床
 を。の。地。お。は。して。五人。の。者。以。取。と。便宜。を。と。待。り。深。さ
 望。顔。の。し。袈。裟。衣。を。着。物。の。の。公。坊。お。お。扮。て。の。び。の。り
 と。と。あ。り。と。の。も。五人。の。者。の。の。く。往。來。て。五人。一。同。お。来。る。こと。わ。く
 の。その。跡。を。は。け。と。と。の。り。も。飯。路。を。ち。え。て。の。の。位。所
 さ。ご。う。の。心。せ。る。と。の。り。と。の。お。た。ら。ぬ。と。不。破。保
 左。衛。門。童。勝。の。浪。の。身。と。の。も。密。に。父。道。た。と。り。扶。助。の。り

葛城の物語

志はたつ山三郎と云流おのりし天地を拜いおどきあふくをなび
 けら麻糸ものさしたち何とぞ主君の敵なりぬべ助太刀をおへやう
 しとぞこれなりしねがふれどももろも望みられども敵大勢なる小臈
 と助太刀をめちひちるんど。庄の入口よりいも口をけしつばなをこ
 もなるんことあるふべもどとのつが麻糸涙をなび。あるうつめを
 羽のこを御供をせしありれし。息つきの水までさすめせな
 んとつがを勝手次第なるべしとのつがを麻糸なび。食事を調じ
 てさすめなび。何とぞと支度して時刻のゆるをまら山三郎へいざ
 と申し。麻糸ふたれ男の体不打扮父のつがの左文字の刀を
 びよ。一更の頃より五條坂の長堤ふゆを。朧月夜を幸ひ麻
 糸もも。麦島のうちふえをめして。時のゆるを待ちけり。試時ハ

是のつゆの時ぞや。寛正五年三月下旬と云。折しも春雨の暗間よて
 道ありけしども。常々往來あけ堤なりし。あつども人たふさ
 ち。びよひの提灯星のごとふほつり。駕籠にららるり。びよ
 飯雁の音かとあやまらる。そて夜のうらふあつびひて人のひさし
 漸々ふたえ。辻行灯のそり。火もやとて。鮮めく按摩とせむ
 びよ。よよふ声も。巴たえ小田の蛙の声のそら。くさえてま
 の鐘五更の時を告げらる。月ハ山の端。おちりけし。い時
 刺しつらと云。山三郎目釘をなめ。鏢元をくらろげ。さすめ手
 して待けらふ。わどなく。切の雲。小稲妻の衣裳を着たる侍一人
 編笠の下。不覆面して。板金剛を踏なびし。あゆま。まらまら
 けら山。一即堤のうらふ飛のそり。くらじや不破伴左衛門くひのハ



名古屋山三郎

五



名古屋山三郎
 五條坂の堤交
 畠のうち小ぢまて
 伴五馬門等五人の
 かつら狐待父の
 仇とむくのん
 とま

山三郎

志々丸

名古屋山三郎

五

名古屋山三郎なごやまさんなり。父の死しに覺悟かくごせしことよがりて氷こおりたてて力を抜
 るなせむの侍高さむらいたかくとあざむき、笑わらて編笠あむがさをぬれしめては方このまうよりたつぬもこ
 り山三郎さんさん。そぞあひひし天あまの夕ゆふのつらむを打ちやうぞ觀念くんねんせしことゆひて
 抜合ぬきあひセ二太刀三太刀戦いくさけり。山三郎さんさんうしろどれを刀たちをうけ損ひびド左ひだりを架か
 沙衣さゐお斬きさげられて地上ちのうへお撲地うつきたつた。山三郎さんさん麻呂あまろを以もつりて
 彼奴あいつが面おもてをよくとる。とゆふ。麻呂あまろ立たり。髻むすこをほくとてひたおし
 月つきやげふまじし。は者ものの土子つちこ泥助どろすけをゆとり山三郎さんさんうなづく間まをか
 く。又またおまじごとくお打う扮はたる侍一人さむらいひとりのさぶらひをうとてあやと来る。山三郎さんさん
 びつふ立たちあざむり。汝あなは不破ふた伴ばん左衛門ざゑもんなるべし。さよ山三郎さんさん父ちちの仇あだを報かへ
 とゆひつ。まはりほくとば侍も笠かさをうととてさう刀たちを抜ぬけり。つて八
 合戦あひあひけり。泥どろおとさうりてよりわく所ところを山三郎さんさん飛とびやうとて胸むねをり不陸ふりく

離はなれど斬きとまゝ。腮あごを以もつて下知げちしとて。あう花はなのそとに走りより月
 の光ひかりを面おもてに映うつしては者ものの太上たいじやう雁かり八はちつとゆとゆふ。おどろくおはじ打う扮はの
 侍一人さむらいひとり来る。山三郎さんさんちりごと立たちひ。いよ伴ばん左衛門ざゑもんこと山三郎さんさん
 ちりそ。父ちちをお世よ恨うらみの刃やいばをひきとひつ。斬きはく。編笠あむがさは
 切きる。さうて刀たちを抜ぬてさうりゆとび。すゝとさうたつひける。運うんの尽つ
 ちや堤つゝの端はたお足をうきまじ。うら伏ふしふたう。所ところを山三郎さんさん一声いっせいをひ
 て斬きける。たちまち首くび堤つゝの下したおまらびおらぬ。麻呂あまろはく。たてとび
 せら。かの首くびをとりあげて。は首くび片かた耳みみをけし。藻も層そうの三平さんへいお
 疑うたがちくゆといふ山三郎さんさんその者ものもまゝ伴ばん左衛門ざゑもんをうとて。はく。はく
 ちりげふりひつ。刀たちの血ちを瓜うりぬぐひ。一息ひといきつ。いゝぬもちり。又また来る
 侍さむらいおる。如ごとくの打う扮はたる。身み材ざい恰好ごうごうは度たハ正ただしく伴ばん左衛門ざゑもんと名なひつ。

名古屋巻之五下

五

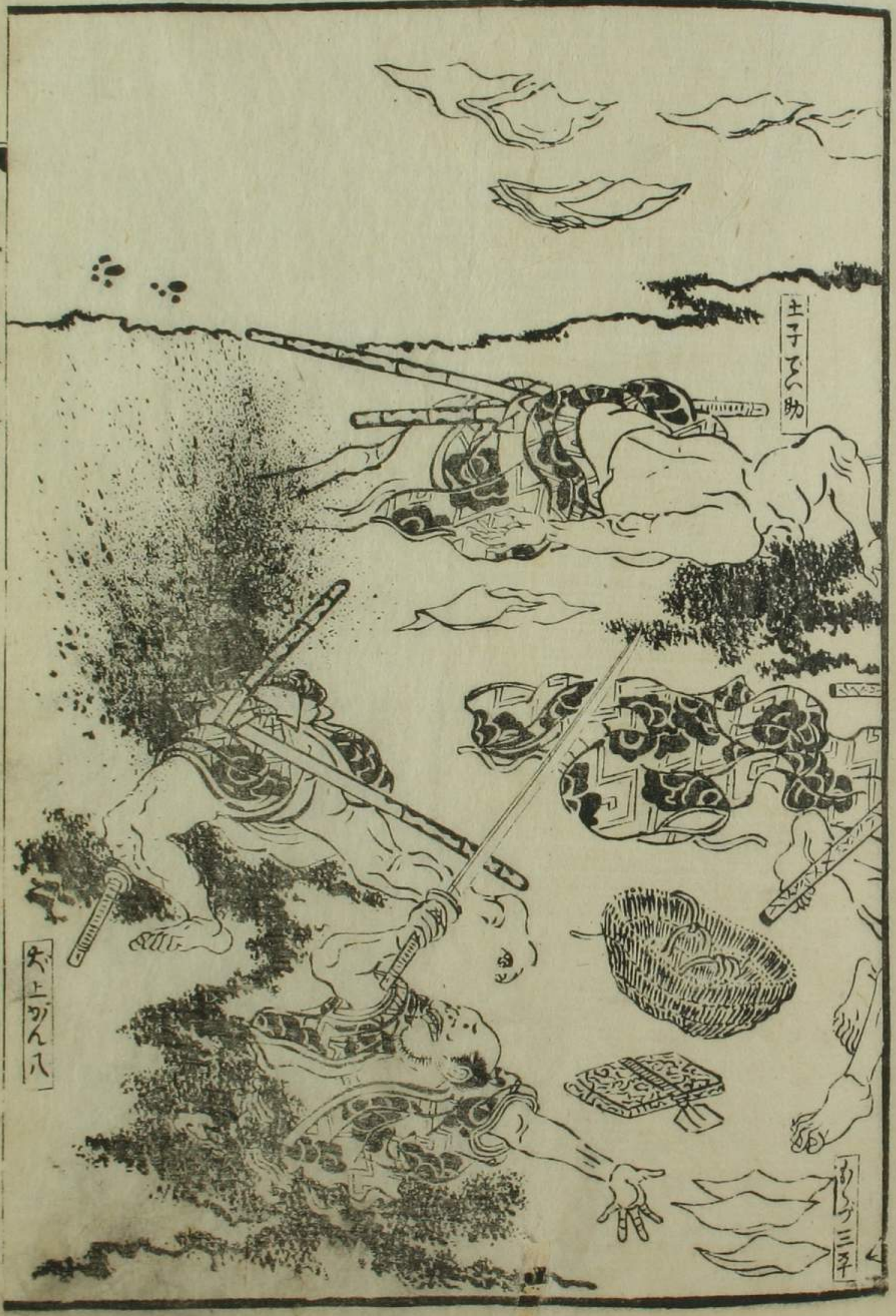
五條坂の堤み
おつて名護屋
山三郎復讐言
五人斬の圖

麻ぞう

山三郎



王子で物



大上り八

かた三平



前さきのごとく小名吉おなきちからしむべ。かの侍さむらいさうえたつとゆひむらじの靴くつ小
 手てをかくる所ところを山三郎やまざぶろうとどろくゆきと腰車こしぐるま小斬きりけり直おと小たふれ
 せど。三十歩さんじゅうほあゆむ。麻あし花はなハツの者もの外ほか奈なとさうえて。あををか
 ておにたふ。切きの者もの前さきふきまれ。者ものの死あぶ骸がふはぬづき。二ふたつふらうて
 どたつれける。山三郎やまざぶろうの父ちちの如ごとくの左文字さもじの名作なまき斬人きりひとの劍法けんぽうキ
 練ねんの早業はやわざが。あるもことつらと麻あし花はな心こころ小感こころトける。山三郎やまざぶろう心こころせに伴とも
 左衛門ざゑもんういふく。とさつ麻あし花はな屍しかばねとありたぬ。ては者ものハ益野えきの蟹かにを
 山やまといふ。山三郎やまざぶろうのひけつ。その者ものハまはして伴とも左衛門ざゑもんと名なひし。その
 又またかきあそいなるに。四人よにんの者ものが。伴とも左衛門ざゑもんをたきけて。父ちちを
 たる仇人あいつかりといふも。本人ほんじんをおさるうちの安堵あんどなす。つとて
 来きづれ。ちつちつとつとつと。やあつとく待まちといふも。人影ひかげも

さむい胸いとさるぞ。此所一方口なり。外外外つる。足元もあはれ。
 こいろうえぬ。夏やもどや。我い出口まで。さうして。さへけぬ。
 ろふあうそ。心とほけ。けいひ。捨て。出口の。たげ。
 びうかの方より。一乗の。駕籠を。やげ。馳来。さける。駕籠。
 ども山三郎。が。刀の。光の。さう。めく。を。え。て。仰天。一。駕籠。と。地上。
 打捨て。飛。び。こ。外。逃。ぬ。山三郎。駕籠。の。うち。う。う。う。
 刀の。さう。さ。い。あ。て。垂。を。あ。げ。て。うち。を。え。し。ば。雲。小。稻。妻。の
 衣裳。着。たる。侍。編。笠。を。さ。さ。り。終。あ。て。駕籠。の。うち。あ。り。
 心。み。あ。ひ。い。ふ。伴。左。衛。門。我。は。是。山三郎。なり。汝。を。あ。て。と。父。の。宿
 恨。を。さ。さ。り。さ。ん。と。れ。す。で。心。を。尽。せ。い。ひ。あ。ら。う。て。今。日。唯。今。出。会
 じ。ら。吉。又。亡。目。亀。の。浮。木。小。あ。ひ。優。曇。花。の。花。咲。時。を。得。た。ふ

異。な。り。と。い。て。出。て。勝。負。を。決。せ。と。い。う。伴。左。衛。門。一。言。を
 こ。ら。へ。ど。何。う。も。た。へ。けん。刀。も。抜。ぬ。駕籠。の。うち。あ。ら。う。と。い。う。め。出
 て。山三郎。が。胸。が。ふ。と。し。は。れ。ら。う。あ。ぞ。山三郎。刀。を。あ。けて。腕。を。さ。り
 ち。ま。其。手。首。の。胸。小。残。り。呀。と。一。声。さ。け。び。て。た。ら。う。所。を。首。ち。う。ふ
 ち。あ。と。い。そ。う。い。く。首。と。さ。り。あ。ら。う。斬。も。曲。中。の。方。小。人。声。お。ひ。た。
 さ。こ。え。け。い。若。首。を。奪。と。て。い。ひ。あ。ら。う。と。手。を。あ。編。笠。小。包。て
 た。ら。う。あ。ら。う。同。も。あ。ら。う。曲。中。の。者。ども。提。灯。を。こ。ら。し。つ。と。手。を。棒。と
 ち。ら。う。と。大。勢。四。方。を。さ。り。か。こ。狼。藉。者。を。打。た。ら。う。と。中。繩。と
 ち。け。と。ひ。し。め。ぬ。山三郎。声。高。く。さ。ら。い。狼。藉。者。あ。ら。う。と。大。和
 の。国。佐。木。判。官。の。家。臣。名。古。屋。山三郎。元。春。と。い。ふ。者。父。の。仇。を。あ
 たら。う。あ。ら。う。と。あ。ら。う。む。だ。ら。う。と。い。ふ。も。曲。中。者。ども。あ。ら。う。



各古風卷之五十一

二其

以場をのりしん鳥のりりちあぐんこのひて同いど。巴大勢捧
 を打うつと。敵たりんにたる所小麻呂大勢を巴つけ山三郎が
 前ふちうづき。相公ハ大事の現身なりぬ。ゆれ等ふ留ひまらぶ。ばく
 現出さゆべ。あとの某がよゆふとさうひひびとと大勢ふむひ。海
 等うごいてみふもさうさうれれ。某人質とありてさふさまる。じ
 ば見方をたむとひささてさしやまらば。といふあぞ。曲中の者どもやうく
 得心してあそびとひひけぬ。山三郎夜のあけをさぬ間あ。いそいで
 小幡ふびとけり。初も山三郎ハ年来の宿志とこげ。いさささうて小
 幡の里ふあつしける。以時己ハ夜のあけをさぬ。さそ伴左衛門が首を父
 の位牌ふ手向むと多ひ。女ハあひく年月又も死苦勞世こと
 といひつ。編笠のうちうと首を取出してえぬ。といふ伴左衛門

あへあむとして葛城が首あむ。その夢現うといひて只あれとる
 なるしあり。されあの大勢ふらとあむれて心せしれ火急の時あむ。
 心ばらば。あうふ残。し手首とえ。何ふあらんあむらまむら
 のあつし。手くびとりたをほしてえぬ。一通の昏とあむらてど居
 たりける。いそいしくひささる。是乃ゆれおさの文なり。その文ふ
 いそく。妻こと以度不思議殿ふらうあひ。あん父の仇ある伴左衛門
 等と手引して。うさやさんとうけつひけつふ前の日伴左衛門妻が
 りとふ来りてやさう。ハ今まであむらざらじ。頃日偶さけけ。汝ハ和州
 子守町の浪人高間冬来右衛門が娘幼名と岩橋といひつる者のは
 ちとさあや。いりくそれふたが。い。い。我別腹の妹あて妻腹
 なり。その妻ああり。懐胎のうち。あ冬来右衛門がゆらふ嫁。

此のつの方まで汝を産つるは。死ぬて父道太の物語までさうな其
 のちへたえておとづれも因がりしが。はくろのふを賣いしと。其
 由さうさうれば。終おとす。父の耻我耻りぬが。父は其を告て金
 子と調ト。そみおがたひせ。はるらじ。そつ。巴も昨夜
 そくぐの金子と以て。我をとおがまひあつぬ。伴左衛門のヤ
 々一所のちく我をとおがえあ。別腹の兄なることさ。ひは。そ
 伴左衛門密おやさう。い。名古屋山三郎といふ者。とく汝が
 めとふ通ひ来るは。死ぬて我深き遺恨あぬが。汝手引しておせ
 らぬ。とのちの。それを因て胸うさう。兄のたの。とくは
 夫と殺さ大罪あり。おんおつ。兄を打。又大罪あり。そ
 同士の縁つなづ。宿世の因果。と我を。の。

御推量。今宵伴左衛門等を打。通ト。伴左衛門と
 かの四人の者と共。おつ。用。別坐敷。おん
 おれ。家内の者。伴左衛門。の深く酔たるは。告て。妻。国序
 まで駕籠と。おれ。入させ。妻。伴左衛門。の。姿。お。扮。て。駕籠。乗
 出。おん。の。手。お。死。人。為。ど。し。の。ご。と。く。お。手。お。

えん。なる。おん。伴左衛門を打しとおがされて。おの。恨。を。し。玉
 何とぞ兄の命を。おん。た。け。を。し。れ。し。今。生。の。願。は。り。敵。の。妹
 と。同。お。の。後。悔。し。玉。り。ん。が。せ。め。て。来。世。の。夫。婦。と。お。が。さ。れ。て。と。り。く
 遍の御。回。向。ぬ。が。ひ。を。る。を。し。伴左衛門。の。已。お。妻。が。の。代。を。は。く
 の。ひ。た。ぬ。が。妻。死。し。と。も。あ。じ。道。順。の。損。と。り。ぬ。お。ん。の。手。お。け

あふとも原のひちまぐけの妻なれば。料とあるべし。妻もほ。かきこのし
 度こそおそれども。仕損せまじと胸をうらさて筆もたぐと涙も農
 も散たぐとば。くもぐや残しゆと。こゝろやふ記しつけて。おくのこふ
 壁も生るりり。草のりりまでもは。はねぬ恨とあひまきりて。斬
 そのみ辞世の歌をかきつけぬ山三郎。読かりて十分おどろけ
 る。思案もくもく。けり。良ありて葛城が首をさりあげて。つり
 えと。鉄将水をおとして白歯とわり。みどりの髪をさりたちて笑る
 が。顔あり。山三郎落涙して。昔。袈裟御前。髪を
 夫の。おの。か。て。遠藤武者盛遠。小殺。さ。母と夫の。命
 と。兄。為。り。は。葛城の。兄の。命。を。た。と。兄。為。小。代。と。わ。り。て
 我手。お。り。たる。心。庭。袈裟。御前。あ。も。と。く。お。ろ。ろ。る。る。と。ぞ。の。志

不便なりとのいふ。晋の豫讓が衣を刺たるた。と。の。妻。あ。れ。が。と。
 が。ね。が。ひ。の。ご。と。く。伴。左。衛。門。と。た。と。け。お。と。の。我。孝。の。道。た。ち。が。に。し。
 さ。し。わ。が。り。伴。左。衛。門。昨。夜。の。支。を。さ。遠。国。小。逃。走。人。の。必。定。之。異。竟。
 我。心。せ。ま。さ。る。修。小。名。告。め。け。て。返。答。を。ま。さ。ご。お。あ。や。ま。し。り。一。生。の。味。
 忽。ち。あ。る。と。父。の。仇。を。む。ら。へ。ぶ。と。者。の。所。為。小。あ。ぐ。と。丑。の。人。小。つ。り。ゆ。ん。
 こと。の。く。ち。を。さ。さ。父。の。霊。魂。夢。中。小。告。あ。ひ。一。昔。の。ひ。ち。ま。ぐ。け。の。女。の
 け。の。妹。の。い。ふ。こと。と。告。ぐ。さ。り。べ。し。理。あ。る。小。左。も。あ。り。し。い。り。ま。ま。ぬ
 くと。か。と。悪。縁。あ。ん。先。年。生。駒。山。の。藤。あ。て。奥。方。を。う。づ。し。時。死。ね。ば。か
 ぬ。一。命。を。と。れ。す。と。の。さ。た。が。り。も。御。主。人。ご。の。お。ん。の。と。た。が。ぬ。父。の
 仇。を。む。く。ん。為。な。ら。う。と。あ。る。ふ。今。小。お。ひ。て。お。く。方。の。御。存。亡。も。さ。ご。ら。や。う
 む。父。の。仇。も。お。得。が。る。支。不。忠。と。や。い。ん。不。孝。と。や。い。ん。我。又。あ。る。と

名古屋巻之五十一

心對鏡天昭白昼
節磨玉雪苦青春



葛城辞世

壁み生るりの草の

つらね恨をるひ斬る

愛想^{あいき}及^{およ}ぬ。さても武運^{ぶくわん}小^こ尽^{じん}らる^{らる}折^おれ^れて^て腹^{はら}切^きる^るも^も真途^{まじち}小^こ
 の^のせめて親^{おや}人^{ひと}小^こ分^{ぶん}説^{せつ}せん^んと心^{こころ}を決^けし^し。血^ち刀^はと^とら^らる^るは^は不^ふて^て。不^ふど^ど
 腹^{はら}小^こつ^つき^きた^たんと^とあ^ある^る折^おれ^れも^も外^との^とこ^こより^{より}や^やれ^れた^たる^るま^まら^らぬ^ぬ。あ^あが^がり^り
 と^と声^{こゑ}う^うけ^けて^て入^い来^きる^る人^{ひと}を^をさ^さる^るふ^ふ。是^{こゝ}別^{べつ}人^{ひと}小^こあ^あら^らず^ず。則^{すなは}ち^ち是^{こゝ}梅^{うめ}津^つ嘉^か門^ん景^{けい}景^{けい}
 春^{はる}ち^ちま^まあ^あら^らず^ずあ^あら^らず^ずあ^あら^らず^ず。い^いの^の麻^{あし}糸^{いと}が^が第^{だい}猿^{ざる}二^に郎^{らう}あ^あら^らず^ず。山^{やま}三^{さん}郎^{らう}
 あ^あら^らず^ずふ^ふら^らひ^ひ切^きけ^けざ^ざら^らぬ^ぬ。ひ^ひと^とま^まら^らず^ず刀^はを^を鞆^{たもと}小^こお^おさ^さめ^めて^てい^いで^で
 む^むえ^えが^が嘉^か門^ん上^{じやう}座^ざ小^こ打^{うち}通^とり^りて^てい^いく^く。猿^{ざる}二^に郎^{らう}が^が案^{あん}内^{ない}あ^あて^ては^はか^から^らず^ず家^かへ^へ
 ま^まら^らず^ず越^こし^しの^の別^{べつ}妻^{さい}小^こあ^あら^らず^ず。某^{たれ}あ^あら^らず^ず河^か内^{ない}の^の国^{くに}金^{きん}剛^{かう}山^{さん}小^こ立^たて^て避^ひ
 仕^し官^{くわん}の^の望^{のぞ}と^とあ^あら^らず^ず。官^{くわん}領^{りやう}勝^{かつ}基^き公^{こう}の^の懇^{こん}望^{ぼう}の^のじ^じが^がく^く。去^き冬^{とう}君^{きみ}
 臣^{しん}の^の契^{せき}約^{やく}と^とは^は上^{じやう}京^{きやう}して^{して}今^{いま}已^い小^こ勝^{かつ}基^き公^{こう}の^の館^{くわん}小^こあ^あら^らず^ず。軍^{ぐん}師^しを^をあ^あら^らず^ず
 礼^{れい}義^ぎあ^あら^らず^ずけ^けら^らず^ず。い^いふ^ふ人^{ひと}の^の貪^{まが}し^しさ^さ引^ひく^くて^て何^{なに}不^ふ足^{そく}あ^あら^らず^ずと^とあ^あら^らず^ずぬ。

夫はほけてつるづは先年某が母病ふるやみ一侍御親父三郎
 左衛門どの某代の金子をめぐりて母の命を救ふと此洪恩心
 銘トせめて露をうもその報せんものとあひつひあむ。三郎左衛
 門どの間打ふあひ玉ひ。和殿もゆくあむと因てあひあむも昔過
 しが。それある猿二郎がやうふよりては所ふかむと住らばうけ
 玉わり。對面して某がうふ旨と告むやと忍出立あてまうて来る
 が途中あて人のあつとさけけ。和殿五條坂の堤あて古傍輩四人の者
 をあへたぐあて葛城とやんゆ阿曾比を手あけられあむはし。
 今腹まふんとせむと一の察する所人たむの誤をさぢてのこ
 おり人若さるあむが大ある心得たむとあふあり。そのあふふとあむ
 べ。おれそ君父の仇とむくつゝあむのいく度も耻と忍び命あむ

あむらいたと千万里と走りやも。たぐひせして仇をむくゆが孝道の
 りりなり。今自殺せんかむの疎忽のゆゑとあむとやとゆふ山三郎其
 理ふらじ。面目なれ体あむと。嘉門あむてゆひける。桂之助どの
 我為小主をあらあむ。そのゆゑれ一席あむとあむ。そのあふふてあふ
 前との。先年大和の国岩倉谷あてあむ首あむとあむ。と某忍
 姿あ打拾てあむとあむ。我家あむとあむ。火術の具とあて太刀取あむ
 殺し。あむ方と奪取。今己小金剛山のあむと家あむりもあむ。あむ
 おりあむ。桂之助どの同居しあむ。佐良三郎が忠義あむと月
 若むのもあむ。御夫婦御親子再会の時を得あむ。あむ。あむ。
 夏は猿二郎よくあむ。あむ。あむ。あむ。あむ。あむ。あむ。あむ。
 只は人の復讐のあむ。あむ。あむ。あむ。あむ。あむ。あむ。あむ。

天のたぬわりのありとよゆらして十余合戦は、伴左衛門運命、
 たる時やあぶん簀の子小足をふらぬきて、よめく所を山三郎、
 足を飛せて合破と踢たふ。乗かうとて刀をこころに、
 かしと斬たういそちよくぞええたりける。めう折しも猿二郎、
 夏をよゆて恙なく、床をともあひて立ちつり、
 とも小天を拜し地を拜して、
 泣けり。げふたのり

三 積善の餘慶

初も大和国佐木館の家の督さめ、
 公の名代として梅津嘉門、
 景春今日着駕のよし、
 判官貞国、
 下知して廣坐敷を掃除させ、
 礼服を着

て相待けりふふとあり、
 梅津嘉門、
 中啟の扇を把威儀堂にて入来り、
 ところり。設の席に居あわすけし、
 所御苦勞のいそりふと相のづれ、
 官領の名代として某まつし、
 月若丸家督の願を出さし、
 某ふゆにむくひ、
 権不破道友をこれへ、
 といひはせし、
 出来り。たるのふ下りて、

（一）

（二）

まりば。海津景春まづ貞国まことくにのひけらひけら先まへだちて子息桂之助きんすけのすけ在京きやうの
 刺放さしはな佚い无む慙ぜんの不行跡ふこうせきかんかん館くわん義政公ぎせいこうのおん引ひ小こ達たつ。官領くわんりやう濱はま名な入い道どう
 を以て内命うちのみことあり。已ま不ふ勘当かんだうの才さいとありし。今いま小このりてふく先まへ非ひ成じやう
 悔いかんかん館くわん小こ對たい。奉ほう。一切いっけつをたてたるより勘当かんだうをゆじ家いへをわづ
 してかん才さいの隠居いんきよあり。この内命うちのみことあり。桂之助きんすけのすけ勘当かんだう許免きよめんのえ
 へ。この前月まへつき若わちも共とも小こ由ゆしてよびむくゆべしと相あひのぶる貞国まことくに
 へ。答こたへもせざら小こ道どう太たいい。出いかそれおろくハハもいてこの前月まへつき
 若わハ現在げんざい母ははの蛛手くもてを呪咀のろしなる罪人つみびと小こゆべた。桂之助きんすけのすけハかんゆじ
 あるとも。この母子ぼし兩人ふたりをえおしありて。御政道ごせいどうたちがつくゆハん珠たま
 更さらツゆら兩人ふたりわくハ志こころをアどゆといひけし。珠たま午うまの方かたい。あもさ
 あり。おしと。兩人ふたり妻つまと花形丸はながたまるを呪咀のろしなる。夏なつハ官領職くわんりやうしやくあり。い。

あ。しめさるる。貞国まことくにの。く。ま。え。あ。げ。ゆ。と。ゆ。わ。不ふ笑わらて。の。ひ。は。れ
 景春けいしゆん居ゐだけた。ふ。あり。と。兩人ふたりを。と。と。あ。り。と。在俗ざいぞくの。常言じやうげん。小こ盗人たうじん。猛まう。
 一ひとの。ハ。正ただ。小こ汝に等ら。が。支さ。あ。ん。道どう丸まる。手て。小こ惡意あくい。を。ま。め。花形丸はながたまるの。代しろ。小
 ち。んと。兩人ふたりを。と。て。月若つきわを。呪咀のろし。その。く。ハ。奸計けんけい。を。ぬ。て。の。前月まへつき
 若わを。罪つみ。小こお。じ。貞国まことくにの。命いのち。と。の。り。て。月若つきわの。首くび。を。打う。せ。ん。じ。の。前
 若わを。岩倉谷いわくらや。小こ引ひ。出い。して。首打くびう。と。せ。し。と。皆汝等みなにが。仕業しごふ。あり。と。ぞ。桂
 之助のすけ。故ゆゑ。坊ぼう。の。根本こんぽん。も。汝に。兒子こ。伴たご。左ひだり。門かど。の。ひ。つ。つ。け。て。ま。め。た。る。ふ。う。こ。ひ
 なる。た。し。分説ぶんせつ。あり。や。と。の。い。ハ。膽いで。ふ。と。れ。道どう。丸まる。少せう。も。ひ。り。ま。ま。を。そ。笑わら
 当時たうじ。官領職くわんりやうしやく。の。軍師ぐんし。と。尊敬そんけい。せ。と。ま。め。の。景春公けいしゆんこう。の。おん。詞ことば。と。も。お。り。え
 へ。ま。ま。の。前まへ。母子ぼし。蛛手くもて。の方かた。を。呪咀のろ。し。た。る。ゆ。ハ。自筆じひつ。の。願ねが。存ぞん。た。ら
 有あ。證しやう。拠よ。あり。と。某等それら。が。奸計けんけい。と。中なかつ。と。ゆ。ハ。何等なんとう。の。証しやう。拠よ。あり。や。と。それ

めづりうけたぬつし度ゆとのひけきび。蜘蛛の手の方ゆその尾ふつき。母か悪
 意をどろいぬ濡衣まゝ。夏よと。はづまをて居たりける。時ふ景
 春はとちて椽ささみ出先刺やしはけおさるる繩つさをもろく
 らぬ引ひせとよまをり。けしび。庭まゝ。梅津が従者大勢ひさ
 背後より。名古屋山三郎。礼服を着し。修験者頼豪院を高年小
 手ふくしてあげ。麻糸様二郎。兩人小繩をこらせて庭上ふひさこく
 たる。膳あられ蜘蛛の手の方強悪の道太もそれをえて仰天し。あげ道く
 ぞちあれける。景春のひける。某由急ありて。の者を捕へ悪人その奸
 計をちくつちふ。孔明せし。び場ふたてのそま。び證批ふる。と山三郎
 それさう。と命つけぬ。山三郎。立ち。刀の端をりて。頼豪院が
 一の繩を。ちちあげく。そくく。白快。伊れとつ。頼豪院面をもち

蜘蛛の手の方道太が。たのしみより。月若を呪咀し。たり。詐筆の願辱を
 以て。その前の母子を罪おぼしたる。本末を。こらふ。白快。けし。び。判官負
 国を。りて。それを。同。と。居たりける。が。たち。ち。怒気。天ふ。さ。の。か
 了。道太が。髪つ。う。て。ぬ。ち。た。か。我。多。病。ある。を。以て。家。変。を。汝。ふ。ぬ
 たる。小。思。慮。浅。く。して。汝。等。小。あ。ぎ。む。れ。たる。ち。を。さ。さ。内。侍。曾。ふ。な。ま
 る。も。あ。さ。た。る。な。く。む。だ。と。人。我。を。い。あ。ぎ。む。く。も。い。う。で。の。青。天。を。あ。ぎ。ひ
 なる。さ。や。こそ。大。小。を。とり。あげ。庭。上。小。踢。お。し。け。し。び。山。三。郎。飛。り。て
 お。さ。へ。つ。け。高。年。小。手。あ。ぎ。む。く。る。を。け。る。蜘蛛。手。の。方。は。体。を。さ。え。積。悪。の。罪
 の。か。き。が。じ。こ。や。ふ。ひ。けん。懐。剣。を。抜。より。も。や。の。ん。ど。あ。さ。つ。き。た。て。う。り
 ぶ。い。あ。ぎ。伏。たり。ける。つ。の。ふ。年。来。の。隠。悪。ゆ。一。時。ふ。あ。り。る。も。絶。是。皇
 天。の。罰。い。あ。の。所。之。豈。お。それ。さ。う。ん。や。時。小。花。形。丸。蜘蛛。手。の。方。の。死。骸。ふ

梅津嘉門 善悪邪正
を乳明て 忠臣孝子
賞をまひ 積悪の
徒小四郎
をころす



月若

山三郎

夏田

山三郎

いそち

乃大

うへで

三八郎乃心



梅津嘉門

花形丸

くらの方

えう花

くら二郎

頼豪院



意を子の才としていさめず不孝の罪。おんおしんをさされか。あさぬ
 一死おん才の果やとて悲歎の涙もむせびけるが母の悪意も畢竟其と
 世にたるとみりれしより更おこし其とも同罪あり。分説のついで
 母が自害の懐剣をひろひとり。已お腹おつきたてんにならむ。
 梅津景春おしめめ。和殿のついで実義ある更同おしめぬ。あさ若者小
 武士道をまてささるといおしむべき更おれども。悪意の母おつるが縁
 ありがせんまてぬ。自殺をまてまり。剃髪深衣お姿をわ母の菩提を
 法語一巻あり。某今八官領おはるて軍務小官子ありと。禅法を修
 べんといぬ。法の法語を和殿お附子まてけしと。今より禅学とてん。

教外別傳の妙をまいり。直指人心の奥をささめてのちくいな僧知識と名
 をあげて。今の汚名をまてつとよといひけし。花形丸感佩しやしく自殺
 をまてまりて。影書弗とおしめぬ。花形丸剃髪して法名を胸月といひ。
 のち一休禪師の弟子となりて。つのお大悟有徳の知識となり。
 西てつと月のひろしをその終お因果がつひのまてちるなり。
 どの歌を詠じて。在お因果禪師と称せしとけり。景春蜘蛛
 の方の屍をとりつけさせ。負国おひひける。道大が悪意の源。瀆名入
 道おこひつらひ。入道の權威を以ておん才を推筆。一旦花形丸の在とは。
 つのあい父子ともおしちひて。おのの家をうらひ。瀆名入道お一味まてき
 結構あり。支ありけし。今已お勝基公と瀆名と確執お切らひ。在の中
 つけめの時節あり。瀆名おくじたる道大。このまてちるひお志。



五條坂神林のあり
名古屋山三郎が飯茶と
祝してあそび
山三郎
の舞妓と

山三郎
銀子
衣服と

ついで
神林夫婦

あそび
舞人
あそび

八重垣

此一圖

神林夫婦

模擬英
一蝶所
畫名古
屋山三
繪巻物
之圖



大

乗物子打のり。行列をせせてついでにけりて。さうおどふ官領の館において。再又道友を丸明あつて。一味の輩を尽く捕へて頼豪院と共に誅戮し。あひ道友の殊小大罪の者あればおりの刑をくりへあふ。さて名古屋山三郎。并小佐々良三八郎夫婦娘。麻呂猿二郎等までめされて。その忠義孝行貞節を御賞美あつて。それゆゑにみそくむくの賞金をたぬりて。けしむ皆く感涙をおじてついでにぬ。さて判官貞国薙髪して桂之助の家をのぼりて。平郡の別館ふらつて住名古屋山三郎を執権に。父三郎左衛門の禄小道友が禄をくりて与へけしむ昔小十倍して富る才と成。麻呂猿二郎小禄をのちとじめて忠義を賞しけしむ。兩人面目を施しておびぬ。又浮世又平の百蟹の巻物を一覽して。画道の奥妙をさるめ。師匠戸佐正見の勘えをゆりて。戸佐又平重起と

名告梅津吉嘉門の吹拳小より義政公の絵所とちりて。妹於菴の曾て兄小字びて自然と画道の妙をさるめたれば。妻おつと。絵と称してその名高く。さるめぬ。佐々良三八郎の抜群の忠臣あれば。桂之助おり。禄はあつんとおびりけり。今桑門の才あれば。禄をうけざれば。再三辞しけしむ。あひてたぬりて。その金を以て長谷部雲六が妹八重垣をあがひひ出して。家小養おさぬ。それゆゑその誠心を感じて。こと。又とと。さて山三郎の葛城が志はあつて。神林がり。小金あつて。アと追福はゆゑに。一生妻をめりて。ちうひけり。はを。三八郎お閉て。のち。あは。不孝の才。ちう。か。の八重垣をおつと。妻とあは。む。男子をまけ。後。ら。名。古。屋。小。山。三。と。稱。じ。

名古屋巻五下

七五

昔話箱妻表紙卷之五下冊終 大尾
 訓あるも此御史おととつみとれ吉兆あるごとや
 待得てえろぞ。不破名護屋の文字小自然不破名護屋と云
 狂言といふまた始なるゆゑよ。後編小詳ある。発兌の時以
 は小山三出雲の神子阿国といふ舞姫は妻として歌舞妓躍
 狂言といふまた始なるゆゑよ。後編小詳ある。発兌の時以

江戸

醒醒齋山東京傳著



一陽齋歌川豊國繪



書賈

本所松坂町平林庄五郎藏梓

各邦書目籍發兌

浪華

三木佐助梓

心齋鐵橋筋北久寶寺町通角

